

日本国際理解教育学会会報

JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

Vol. 31 2007 (平成 19) 年度 No. 1 平成 19 年 10 月 4 日編集発行：日本国際理解教育学会事務局
〒161-8539 東京都新宿区中落合 4-31-1 目白大学内 TEL：03-5996-3166 FAX：03-5996-3125
E-mail：kokusai@mejiro.ac.jp Website：http://www.kokusai.com

目次

| | | | |
|----------------------------|----|------------------------|----|
| 新旧会長挨拶 | 1 | 2007(平成19)年度事業計画・役員・予算 | 13 |
| 日本国際理解教育学会第17回研究大会を終えて | 3 | 理事会(各委員会等)報告 | 14 |
| 第17回研究大会参加記 | 5 | 会員だより | 15 |
| スタディーツアー報告 | 7 | 第8回韓国国際理解教育学会の案内 | 17 |
| 日中韓教材開発ワークショップ | 8 | 公文国際奨学財団・海外派遣報告 | 18 |
| 博学連携教員ワークショップ 2007 in みんなく | 11 | お知らせ(これからの行事/イベント案内) | 19 |
| 2006(平成18)年度総会報告 | 12 | 事務局通信 | 20 |

新旧会長挨拶

会長に就任して

明日の地球社会に 「希望の未来」をもたらす学会へ

多田 孝志



7月の総会において会長に推挙され、承認されました。本紙面をかりて会員の皆様にご挨拶を申し上げます。

前会長米田伸次先生は、2期6年間にわたり、高い見識、使命感と情熱をもち、学会の発展に尽力されました。また、今期で理事を勇退された天野正治、新井郁夫、千葉果弘、中島章夫、樋口信也の諸先生方は、本学会の活動・研究に大きく貢献されました。深く敬意を表すとともに、今後の変わらぬご支援をお願いいたします。

さて、新体制の方針について、総会での提案を基調に、主な内容について、次の2点に集約して記します。

第一に、何よりも、会員のニーズに応える課題についての研究・実践の展開です。

その一は、21世紀の国際理解教育の概念や使命等の考察・解明です。世界の現状を看視しますと、競争と効率が強調

される潮流の中で、人間関係、自然との関わりなどが途絶され、個人や少数者の価値観や生き方、尊厳が喪失される傾向が強まりつつあるように見えます。この状況を打破し、共生を基調とした市民社会を構築できる人間を育成する教育としての国際理解教育の意義を再検討し、その使命を明らかにしていくことは、本学会の基本的な課題です。

二つめは、教育現場の実践的課題に応える研究・研修の推進です。多くの教育関係者たちが、国際理解教育の必要性は認識しつつ、実践の目標設定、カリキュラム開発、学習方法の改善などの具体化に戸惑っている現状があります。こうした状況を直視し、教育実践に資する研究・研修を推進していくことは、本学会の使命と考えます。

会員が学会の諸活動に参加する機会を拡大し、研究・研修、論議する場を数多く設定することにより、これらの課

題を解明していくことができると期待しています。

第二に、知の統合への取り組みです。その一は実践研究と理論研究との連携です。教育の現場にこそ優れた理論が潜在しています。他方、教育実践は理論的基盤を得てこそ質的向上がもたらされます。両者の統合は、国際理解教育の発展に不可欠です。

二つめは、さまざまな教育資源の活用と地域ネットワークの形成です。関係諸機関、地域の人々などとの連携を組み込むことにより、視野の拡大、思考の深化、主体的行動力の向上などが効果的に促進されます。このための具体的

な方途を探っていくことが必要となります。

三つめは、諸学の研究組織との学際的共同研究、および海外の関連組織との連携の促進です。国際理解教育の概念や現代的課題の解明には学際的な共同研究や、外からの異なる視点が必要と考えるからです。

会員の皆様の参加、協働、支援を得て、厳しい状況下にある我が国の教育現場と、明日の地球社会に「希望の未来」をもたらす学会にすべく努力して参ります。関係各位のご支援をお願い申し上げます。

(目白大学教授)

会長に退任に当たって

これからの「国際理解教育」の構築に向けて

米田 伸次



1991年、日本国際理解教育学会の立ち上げに参加、2001年、天城 勲初代会長のあとを受け、6年間学会会長を務めさせていただき、今年7月の全国研究大会の総会で、多田孝志副会長に会長を引き継がせていただいた。

1959年、ユネスコ協同学校の帝塚山学院中・高等学校に務めたのが契機となり、今日まで46年間国際理解教育と向き合ってきた。この間、1971年に、民間団体の国際理解教育研究所の設立に参加(1993年から帝塚山学院大学付置国際理解研究所に)、2005年まで、30回にのぼる研究所主催の国際理解教育賞論文募集事業にも携わってきた。「国際理解教育と40年」学会紀要「国際理解教育」6号)こうした私の国際理解教育の取り組みには2つのこだわりがあった。その一は、人権、平和、民主主義をキーコンセプトにした1974年のユネスコの「国際教育(略称)」、さらには、「平和の文化」やESDをキーワードにすえたユネスコの新しい「国際教育」の提起を主体的に受け止めた国際理解教育の構築、その二は、アジア、とりわけ北東アジアの国々との相互理解を深める国際理解教育の推進であった。この私のこだわりは道半ば、当分続くことになるだろう。

ところで、第17回学会研究大会の特定課題シンポジウムのテーマは、「転換期を迎えた国際理解教育」であった。私が、国際理解教育と向き合ってきた46年間からみても、ここ数年は、国際理解教育にとって最大の転換期ではないかと思う。先般の学会の科研究で、教師を対象に行った

調査での設問「国際理解教育の今日的課題は」の回答では、「グローバル化に対応した国際理解教育の構築」「国際理解教育の実践の環境づくり」が突出していたのが印象深かった。前者では、グローバル化が生み出した諸課題に国際理解教育をどう対応させるかがポイントである。後者では、子どもの豊かな感性や人間関係、自尊感情の育みが阻害され、成果・評価主義、管理体制のなかで教師は疲弊し、多忙ゆえ研修の機会が十分得られず、教師相互のつながりや教師と子どものコミュニケーションが希薄になっている学校教育の現実のなかで国際理解教育をどう実践していくのがポイントであろう。とりわけ、近年の社会の内向化(「ナショナリズム」化)や総合的学習の「退行」は、国際理解教育に逆風になっていくのではと危惧される。先般の研究大会のシンポジウムでも討議されたが、「これからの国際理解教育」の構築のためには、教師と研究者がしっかりと連携しつつ、こうした学校教育や社会、世界の現実を直視し、何よりもまず、子どもの幸せ、豊かな人間形成、人と人とのつながりを第一義にすえた学校文化の創造に、国際理解教育がどんな役割を果たしうるのかを考えるとところから出発させることが大切ではないだろうか。

最後になったが、「これからの国際理解教育」の構築と実践に日々努力しておられる教師、研究者の方々に心からの敬意を表し、今後益々のご奮闘と学会の発展を祈りつつ、会長退任の挨拶とさせていただきます。

(帝塚山学院大学国際理解研究所顧問・前所長)

日本国際理解教育学会第17回研究大会を終えて

大会実行委員長 大津 和子

2007年7月28日(土)・29日(日)に北海道教育大学札幌校を会場として、日本国際理解教育学会第17回研究大会を開催いたしました。冬の長い北海道では、6月から7月にかけての週末は、学校教員のほとんどが部活動の試合で忙殺されるため、研究大会への参加が難しいという事情から、例外的に7月末の開催となりました。が、なにぶん札幌は地理的にも心理的にも遠いものですから、全国からどれくらい参加していただけるだろうかと、危ぶんでおりました。幸い、韓国・中国からの20名をも含めて、予想以上に多くの方々にご参加くださり、無事終了することができました。

自由研究発表は計48件で、2日間にわたって各5会場、充実した発表と熱心な討議が展開されました。恒例の「特定課題シンポジウム」は、今年度は「公開シンポジウム」を兼ねて、「転換期を迎える国際理解教育」と題して行われました。国際理解教育への関心や取り組みが後退しているように見える今日、「転換期」をどのようにとらえ、どう乗り越えていくのかについて、渡部 淳(日本大学)、嶺井明子(筑波大学)、藤原孝章(同志社女子大学)、中山京子(京都ノートルダム女子大学)の各氏から提案されま

した。会場からも多くの発言があり、200名以上の参加者で満員の会場は熱気と暑気にあふれていました。

第1日目 夜の懇親会は、芸術文化課程の学生によるモーツァルトの弦楽四重奏曲「ディベルティメント」のあと、米田伸次前会長の乾杯音頭ではじまりました。中程では韓国からの参加者5名による伝統舞踊「扇の舞」と伽耶琴(カヤグム)の演奏が入って、そのあでやかさにしばし見入りました。110名の方々の参加を得て、北海道の美味を満喫しつつ和やかな懇談を楽しんでいただきました。

第2日目 午後のオプション・ツアーでは、白老の「アイヌ民族博物館」に出かけました。参加希望者が多く、大型バスは補助席も満席で、車中はかなり窮屈になってしまいました。博物館ではアイヌの伝統的な生活様式などの説明を受け、古式舞踊やアイヌ伝統食も味わっていただきました。爽やかな夏の北海道で充実した2日間を過ごすことができました。とのメールが後日多数届き、ほっと胸をなで下ろしたことでした。

本大会のプログラム

自由研究発表 7月28日(土) 9:30-12:00

A「ESDとユネスコ活動」

司会：山西優二(早稲田大学)、小林 亮(玉川大学)

- ESDを実現するための国際交流について
飯島 眞(越谷市富士立中学校)
- 環境教育における学校とNGOの連携 マレーシアの事例から
手嶋 将博(文教大学) 今田 晃一(文教大学)
- UNESCO ASPnetを通じた協同実践 国内とアジアでの連携
伊井 直比呂(大教大附属池田高校)
楊 傑川(中国人民大学中等学校・奈良教育大学)
- 大学におけるユネスコ活動の現状と課題
小林 亮(玉川大学)
- 博学連携教員研修の実践的展開 ESDアウトリーチ教材の開発
今田 晃一(文教大学) 木村 慶太(広陵町立広陵中学校)
日比野 功(東大阪市立唐津中学校) 手嶋 将博(文教大学)

B「中学高校における国際理解教育」

司会：田尻 信壹(富山大学)、釜田 聡(上越教育大学)

- 持続可能な社会のあり方を考える社会科の授業
松田 剛史(北海道教育大学旭川校附属中学校)
- 多文化主義教育のための中学校プログラム
趙 恩敬(Jeonju Keunyoung Middle School)
- 「つながり」「多様性」「変化」をキーワードにした国際理解教育の実践 学校教育の現場から
小嶋 祐同郎(広島県大竹市立栗谷中学校)
谷口 尚之(奈良教育大学附属中学校)
祐岡 武志(奈良県立法隆寺国際高校)
南 美佐江(奈良女子大学附属中等教育学校)
- 公立学校の式典における「君が代」斉唱の強制と国際理解教育の在り方について—高等学校「公民科」学校設定科目「異文化理解」での実践を手がかりとして—
松井 克行(大阪府立三島高校)

- 学校設定教科「国際理解」の取り組み
細田 孝哉(北海道札幌清田高校)

C「海外の国際理解教育から学ぶ」

司会：森茂岳雄(中央大学)、高橋順一(桜美林大学)

- 異文化間トランス
山田 祐子(立教大学大学院)
- ポストン子ども博物館にみる日本理解の内容と方法
磯田 三津子(京都橋大学)
- オーストラリア先住民族アボリジニの教育の知恵 日本の国際理解教育にむけて
青山 晴美(愛知学泉短期大学)
- 民族博物館を利用した「少数民族文化教育」 中国における国際理解教育の事例
姜 英敏(北京師範大学)
- ポストコロナルの視点にたった先住民学習の意義と可能性 全米アメリカン・インディアン博物館の展示表象と教育活動の分析
中山 京子(京都ノートルダム女子大学)

D「市民性を育成する国際理解教育」

司会：二宮皓(広島大学)、宇土泰寛(椋山女子学園大学)

- 実践の場としてのNPO活動を考える—多文化共生と若者の自立支援を目指すNPO「うちのスペース・にいがた」の活動を通して—
荒川 洋子(新潟市立白根北中学校)
- 教育実践を創造するネットワークの一考察
近藤 牧子(早稲田大学大学院)
- カナダのシティズンシップ教育におけるアイデンティティの位置づけ—WNCIP社会科共通フレームワークの分析を手がかりに—
坪田 益美(筑波大学大学院)
- 市民性の教育の教員養成プログラムの内容と特徴 チューターへのインタビューを通して
橋崎 頼子(神戸大学大学院)

E「大学における国際理解教育」

司会：桐谷正信（埼玉大学） 山田千明（共栄学園短期大学）

1. スマトラ島沖津波への学生派遣プロジェクトー大学ボランティアセンターによる国際協力活動ー
市川 享子（明治学院大学）
2. 保育者養成と国際理解教育 II カリキュラム開発の実践
山中 美子（立教女学院短期大学）
畠中 徳子（立教女学院短期大学）
3. ベトナム・スタディツアーを基にした教材開発と実践
栗山 文弘（文化女子大学室蘭短期大学）
4. グローバリゼーション時代における国際理解教育の実践課題：国際理解教育はいかにしてコンフリクトを扱うか
永田 佳之（聖心女子大学）

公開シンポジウム 7月28日（土）14:00-17:30

「転換期を迎える国際理解教育」

パネリスト

国際理解教育の転換期をどう乗り越えるか・教師の資質形成に着目して考える-

渡部 淳（日本大学）

国際理解教育研修講座の現象をどうみるか・国際理解教育の転換期へのひとつのアプローチ-

嶺井 明子（筑波大学）

自律的、それとも他律的転換？-国際理解教育の実践的課題-

藤原 孝章（同志社女子大学）

国際理解教育実践の多様化と方向性

中山 京子（京都ノートルダム女子大学）

自由研究発表 7月29日（日）9:30-12:00

F「国際理解教育の意義と課題」

司会：田淵 五十生（奈良教育大学） 渡邊 千景（桐朋女子中高校）

1. 文化理解を教育するというこゝろー教育哲学の観点からー
市川 秀之（名古屋大学大学院）
2. 1980年代以降の韓国における平和教育研究史
朴 寶英（Yonsei University）
3. 脱北者児童の教育
金 甲馨（Ojeong Elementary School）
4. 単一民族国家韓国の多文化主義的転換と国際理解教育
韓 敬九（Kookmin University）
5. 科学としての国際理解教育の理論的課題とは何か その可能性と限界を考える
川端 末人（神戸大学）

G「多文化共生をめざす国際理解教育」

司会：永田 佳之（聖心女子大学） 小嶋 祐何郎（大竹市立栗谷中学校）

1. 日系ブラジル移民の社会的統合の計量分析：因子分析による社会的統合指標の算出
前田 ひとみ（目白大学）
2. ブラジル人学校との交流をもとにした国際理解教育 静岡県浜松市の小学校の実践から
田淵 仁（静岡大学附属浜松小学校）
岩本 廣美（奈良教育大学）
3. アイヌ文化学習 末広小学校の取り組み
堀 幸美（千歳市立末広小学校）
4. 「開発」教育と「先住民」問題 アイヌ民族の取り上げ方をめぐって
ジェフ ゲーマン（九州大学大学院）
5. アイヌ神謡集を教材化しよう！ 北教大札幌校・小学社会科教育法の一授業から
鈴木 哲雄（北海道教育大学札幌校）

H「小学校における国際理解教育」

司会：伊井直比呂（大教大附属池田高校） 今田晃一（文教大学）

1. 教科書の中の台湾、現実の台湾
太田 満（川崎市立橋小学校）
2. 青少年赤十字活動をいかした授業実践
草野 友子（江別市立大麻小学校）
3. 小学校における国際理解教育の実践 カンボジアの子どもたち
東峰 宏紀（恵庭市立若草小学校）
4. 中国の小学校における国際理解教育の実践
王 燕玲（Affiliated Primary School to Zhengzhou Middle School）
5. 中国の新科目「小学校品德と社会科」における国際理解教育
郭 雯霞（人民教育出版社・カリキュラム教材研究所）

I「言語と国際理解教育」

司会：寺島隆吉（岐阜大学） 嶺井明子（筑波大学）

1. ことばの豊穰性と国際理解教育
横田 和子（早稲田大学大学院）
2. 子どもたちへの多言語による読み聞かせー15回の「お話コンサート」からー
須藤 とみ系（広島女学院高校）
3. グローバルイシューを意識した内容中心指導法による授業展開
英語の授業実践から
石森 広美（宮城県小牛田農林高校）
4. 台湾の初等英語教育に関する調査 台北市の現状から日本の小学校英語への示唆
伊東 弥香（東海大学） 金澤 延美（駒沢女子短期大学）
5. 異文化理解としての高校中国語教育
柳 雅章（北海道札幌工業高校）

J「日系移民をテーマにした国際理解教育」

司会：藤原 孝章（同志社女子大学） 服部 圭子（近畿大学）

1. 日系移民をテーマにした国際理解教育の単元開発と実践（1）
移民学習の視点と教材開発
森茂 岳雄（中央大学） 中山京子（京都ノートルダム女子大学）
2. 日系移民をテーマにした国際理解教育の単元開発と実践（2）
小学校2年生の総合学習活動「Let's 盆ダンス」
居城 勝彦（東京学芸大学附属竹早中学校）
3. 日系移民をテーマにした国際理解教育の単元開発と実践（3）
中学選択社会で多文化共生社会を考えるー
織田 雪江（同志社中学校）
4. 日系移民をテーマにした国際理解教育の単元開発と実践（4）
高校実践「国際理解」でのニッケイの人たちのことばを使った
レシテーション活動
田尻信壹（富山大学）
小松 万姫（東京学芸大学附属高校大泉校舎）
5. 日系移民をテーマにした国際理解教育の単元開発と実践（5）
移民系博物館を活用して教員研修を支援するー
福山 文子（海外移住資料館）
中山 京子（京都ノートルダム女子大学）

右から多田新会長、大津大会委員長、米田前会長の各氏



第17回研究大会参加記

公開シンポジウム「転換期を迎える国際理解教育」に参加して

玉川大学 小林 亮

国際理解教育への関心や取り組みは後退しているのか？日本の学校教育において国際理解教育に未来はあるのか？あるとすれば、それはどのような形での国際理解教育なのか？2007年7月28日、29日の両日にわたって北海道教育大学札幌校にて開催された日本国際理解教育学会第17回研究大会のメイン・イベントである公開シンポジウム「転換期を迎える国際理解教育」は、まさにこうした国際理解教育の「死活問題」を真剣に討議する場となった。文科省を中心とする教育行政、学校現場での教育実践、そして研究という3つの視座が交錯する中で、国際理解教育の転換期をどのように捉え、それにどのように対応してゆくのかのモデルを模索しての議論が、4名のパネリストによって学際的観点から展開された。まず渡部淳氏（日本大学）から、「国際理解教育の転換期をどう乗り越えるか」というテーマで話題提供がなされ、3年間にわたる科研費研究の成果をふまえて、国際理解教育を担う教師の資質形成がきわめて重要であること、そのための教師研修システムの開発が急務であることが提言された。続いて嶺井明子氏（筑波大学）から、「国際理解教育研修講座の減少をどうみるか」というテーマで、主として教育行政の側面から、「国際理解教育」の名を冠した教員研修講座が減少し、英語教育等によって置き換えられている現状が指摘され、「国民」意識の育成や基礎学力の向上が関心の中心となっている現在の初等中等教育において国際理解教育というものをどう位置づけてゆけるのかという厳しい問いかけがなされた。藤原孝章氏（同志社女子大学）は、「自律的、それとも他律的転換？」というテーマで話題提供を行い、「転換期」という状況認識自体が問題とされるべきだと述べた。現政権や文科省の教育政策の変更、日本社会の変化、国際動向の変化などをふまえても、それらに振り回されるのではなく、むしろカリキュラム・デザインを中心として転換期を自律的にとらえるための視点が必要であり、とくに国際理解教育が育成しようとする市民像を明確にすることが緊要の課題であると指摘した。最後に中山京子氏（京都ノートルダム女子大学）は、「国際理解教育実践の多様化と方向性」というテーマで実践に焦点づけた分析を行い、学校での国際理解教育の実践がきわめて多様化していること、またそれと連関して、学習内容の相互関連性、外部連携性、未来志向性の3つの傾向が顕著になってきていることを今後への課題として提示した。

パネリスト達のこうした話題提供を受けて、司会の山田大明氏（共栄学園短期大学）と上別府隆男氏（東京女学館大学）またフロアの参加者を含めた形で議論が展開された。さまざまな論点が提出されたが、そもそも現在どのような意味での「転換期」なのか、その内実をもっと明確化する必要があるという指摘や、国際理解教育を「教科」モデルで捉えるのではなく、学校教育全体を貫く一つの「視座」として開発して

ゆくべきだという問題提起は、とくに重要だと思われる。またシンポジウムの関心は主として国際理解教育という「学問」の存立に向けられており、学校教育の現場で苦闘する教師からの具体的ニーズには十分答えられていなかったのではないかという批判も重く受けとめてゆくべきであろう。さらに海外の国際理解教育の現状や課題（たとえば欧州における「ヨーロッパ市民教育」など）およびユネスコの取り組み（ASP等）をもふまえた、よりグローバルな視点からの国際理解教育のあり方の検討がもっと行われてもよかったはずである。会場には中国と韓国からの国際理解教育関係者も参加していたのだから、彼らとの議論ももっと深めてもらいたかった。全体として、議論自体の水準は非常に高かったし、重要な論点が多く提示されたものの、今後に向けてさまざまな形の課題を積み残したシンポジウムとなった。

一日目の自由研究発表を中心に

同志社中学校 織田 雪江



懇親会では、韓国側出席者の舞踊に感動
(編集提供)

日本国際理解教育学会に今年入会し、研究大会に初めて参加した。初日の自由研究発表は、「中学高校における国際理解教育」「海外の国際理解教育から学ぶ」など三つの分科会会場を歩き来しながら発表を聞いた。発表者は、大学院生、中高や大学の教員など、その国籍

も様々で、会員の裾野が広く多様なことが、学会の活動を豊かなものにしていて感じた。

姜英敏氏は、2002年より漢民族の学校でも少数民族に関わる教育を行うべきとする中国政府の方針にともなって、北京市の中華民族博物院で実践されている少数民族教育を、写真を豊富に用いて紹介した。質疑応答では、チベット族の成人式を漢民族の学校の生徒が体験する事例のように、少数民族の伝統的な儀式を体験させる博学連携プログラムは、本質主義に陥ってしまうのではないかという危惧が指摘されたが、このように中国政府が少数民族教育をカリキュラムに取り入れようという試み自体が画期的なことであることがわかった。中山京子氏は、全米アメリカン・インディアン博物館における、先住民学習の意義と可能性を、ポストコロニアルの視点に立って明らかにした。この博物館では、先住民自身がインタープリターとなり、「われわれ」のこととして子どもたちに語りかけるのに対して、子どもたちも自分のことを語り出す様子が逐語記録を用いて紹介され、生き生きとした学びの場面が想像できて興味深かった。そして、磯田三津子氏が研究の対象としていたボストン子ども博物館の「日本プログラム」においても、ある日本人エドゥケーターやボランティア

の存在が大きいことを知り、人が介在することによって、博物館がより魅力的なものになることを改めて感じた。

大会二日目は、初めて自由研究発表に臨んだ。「日系移民をテーマにした国際理解教育」の会場で、昨年四月よりチームを組んで新たに開発してきた単元について、五組が発表を続けた。発表の準備のために、授業の展開を整理し、生徒のレポートなど読みながら、単元目標に対しての成果や課題をまとめる作業は、多大なエネルギーが必要だった。しかし、こうして自分の実践をふりかえる過程そのものに意味があり、発表後には示唆に富むコメントもいただくことができ、より良い教材を開発していく上で、学会での発表が貴重な機会となることを実感した。

第 17 回国際理解教育学会に参加して

倉敷芸術科学大学 黒田 明雄

シンポジウムのテーマ「転換期を迎える国際理解教育」について、どのような問題提起がなされるのかという思いで参加した。もう少し理論研究の課題を、丁寧に説明されることが大切なように思われた。教育現場の実践者には、学習領域やホームページでの実践事例の紹介は、実践研究の方向性や位置付けの上で示唆を与えるものであったと思う。

自由研究について、今日、国際理解教育の実践がおこなわれにくい状況ではあるが、グローバルな視点と多文化的な視点を組み込んだ教材・単元開発と実践がおこなわれている。移民（国際移動）という社会事象に着目し、各方面と連携し教材セットを開発し、実践方法まで明示した取り組みは活用性応用性の高いものであると思う。今後も全国的に科研で示された学習領域において、単元レベルでの教材開発や実践研究の積み上げが進んでいくことを期待したい。

三つ目は日中韓の教材開発ワークショップについて。オブザーバーとして参加させていただいた。既に日韓共通歴史教材については、人的研究交流の上に、多くの困難を乗り越えて成果が発行されている。国際理解教育学会では、日中韓の3ヶ国の取り組みである。教員同士の共通理解に大変な苦労があると思われる。しかし、日中韓の児童生徒が、開発された共通教材をもとに相互理解を深めている姿を想像するとき、この取り組みに大きな意義を感じる。最後に、歴史教育と多文化共生の教育について。戦後60年を経過しても、なお日中韓の間には深い溝がある。多角的な視点から近現代史の出来事をとらえる教育に時間をかけていかなければならないと考える。戦後の国際理解教育の原点は「戦争」である。日中友好と国交回復の素地をつくった故内山完造や故岡崎嘉平太氏の志を国際理解教育においても反映して生かしていきたいものである。今後、小中高大の教師や青少年の国際交流は極めて重要な意味をもってくるように思う。

さまざまな地域や組織で日本人と少数派の人々との間でのいろいろな問題が起こっている。富



日中韓での教材開発の話し合い
(編集提供)

山コーラン事件や相撲界の問題は象徴的な事例ではなかろうか。そこには習慣や価値観の違いがある。多文化社会に生きていることを意識させられる。韓国やドイツなどでも多様性に対する課題を突きつけられている。学校教育の果たす役割は大きい。困難なことではあるが、多文化共生の教育は避けて通れない。国際理解教育学会及び国際理解教育の実践は重要な役割を担っている。現代社会や学校の状況からみて、改訂版学習指導要領の中に、異なる文化や少数派の児童生徒の存在に配慮した教育指針が明記されることを願う。

キーワードは「ハイブリディティ」

広島経済大学 田中 泉

第2日午前の分科会「日系移民をテーマにした国際理解教育の単元開発と実践」は、多文化社会米国際理解教育研究会のメンバーによる、本年3月に発行された『移民を授業する - 日系アメリカ人学習活動の手引き - 』で提案されている授業の実践およびアウトリーチ教材



プランテーション労働者の服装をした発表者
(編集提供)

や教員研修についての紹介であった。どの報告も移民史学習の重要性を改めて認識させるものであった。

会場の教室に入ると、頭に手拭、腕に手甲、緋の服を纏った3人の発表者が出迎えてくれる。ハワイのサトウキビ畑で働く日系移民の衣装で、和風から洋風に変化したことが分かるように、それぞれ微妙に違っている。洋風に仕立てられた緋の服は「移民文化のハイブリディティ」を示している。

教卓の前には、古ぼけたトランク、写真・ポスター、手書きの絵などが所狭しと並べられていた。中山京子氏の説明で、トランクは、紙芝居「弁当からミックスプレートへ」、移民カルタ、強制収容を命令するポスターなどのアウトリーチ教材が入った「ニッケイ移民トランクキット」であることが分かる。その中に、SPAM 缶があった。SPAM とは、Spiced Ham の略で、肉の缶詰である。昨年度の在外研修中に、サンフランシスコの日系人のパーティで食べた「スパムむすび」の材料である。このむすびも、ハイブリディティ。

第2報告で紹介された総合学習「Let's 盆ダンス」について、質疑ではダンス音楽のハイブリディティに議論が集中したが、私は、サンフランシスコの日本人町で行われた盆踊りでの、日本では見ることのない「踊りの前の僧侶の読経」を思い出していた。これも「盆踊りと読経」というハイブリディティなのではないだろうか。

サンフランシスコの全米日系アメリカ人歴史協会の展示に、沖縄にルーツを持つ日系三世がビスケットの空き缶を利用して作ったパンジョーのような音のするがあった。あれもハイブリディティを示す「モノ」教材として利用できそうだなと思いながら帰途に着いた。

スタディ - ツアー 報告

ポロトコタンへのスタディ - ツアー

京都ノートルダム女子大学 中山 京子

大会2日目(2007年7月29日)の午後には「しらおいポロトコタン」へのスタディーツアーが開催された。「しらおいポロトコタン」とはアイヌ民族博物館が運営する野外博物館などの施設群「アイヌ民族博物館」のアイヌ語名である。「ポロトコタン」とは「大きい湖の集落」を意味する。北海道教育大学から約1時間半で到着し、大会後の心地よい疲労感に包まれた一行を、美しく光る静かな湖面が出迎えてくれた。

本博物館は、アイヌ文化の伝承・保存、並びに調査・研究、教育普及事業を総合的に行う社会教育施設として、1976年、財団法人白老民族文化伝承保存財団として設立され、1984年には、アイヌの有形・無形文化を展示し、さらに学術的に調査・研究を行う施設としてアイヌ民族博物館を並置・開館させ、1990年に現「財団法人アイヌ民族博物館」に改称した。日本人観光客だけでなく、韓国や中国からの観光客数も増加する中で、ハングル、中国語、英語のパンフレットも用意されている。

野外博物館の性格をもつ園内は、近代ゾーンとコタンゾーンに分かれ、コタンゾーンにはかつてのアイヌの住家であったチセや、プ(食料庫)、ヘベレセツ(子グマの飼養檻)、チブ(丸木舟)などを復元・展示して、アイヌのコタン(集落)を再現している。

チセでは、アイヌ古式舞踊を鑑賞後、アイヌの文化についての観光客向けの簡単な解説を聞いた。その後、自由に園内を散策し、チセでより詳しい話を伺ったり、解説を聞きながら博物館見学を行ったり、チブの製作場で作業中の学芸員ヘインタビューをしたりした。体験学習館では、チェプオハウ(サケの三平汁)、チマチェブ(サケの串焼)の日常食や、儀式やお祝いのときなどの特別料理メンクルチサッスイェブ(イナキビご飯)やシト(団子)、薬用として飲まれていたスギナ茶をいただいた。

博物館展示の表象は来館者に何を問いかけるだろうか。チセは観光客の舞踊鑑賞や解説のために実際よりも大きく作られているという。解説は中国語、韓国語を巧みにあやつり観光客の笑いをつくりだす見事なトークショーである。働く人々はアイヌ文化を伝えるインタープリターとしての役割ではなく、観光客が求める「アイヌ」を演じているところがある。民族博物館としての館の在り方と、観光客としての来館者の求めとのほざまにある「しらおいポロトコタン」の姿から、人々の先住民へのまなざしの一端を垣間見たようであった。

木製の容器に盛られたアイヌの伝統料理。鮭がふんだんに使われたヘルシーな食事であった。

白老ポロトコタンでアイヌ料理に舌づつみ

富山大学 田尻 信彥

松前藩の蠣崎波響が描いたアツケシの長老イコトイ(夷酋列像)は、清朝の朝服とロシア製の緋色のコートをまとっている。江戸時代、アイヌの人々が大陸との貿易で手に入れた品である。とても鮮やかな彩色画なので、アイヌの姿絵として記憶に残っている方も多いと思う。今回の札幌大会の折、是非立ち寄ってみたいと思っていたのが、白老町のポロトコタンであった。今回、ツアーを企画していただいたことに大変感謝している。ツアーの概要については、即席のツアーコンダクターを務められた中山京子氏の報告があるので、ここではポロトコタンでの私の個人的感想を書かせていただく。

当地でアイヌの伝統料理を堪能できたことは、本当にいい思い出となった。串に刺して焼いた鮭(チマチェブ)、鮭と野菜の汁物(チェプオハウ)、メンクルサッスイェブと呼ばれたご飯、団子(シト)の4品(写真を参照)。団子はイナキビ(黄)、ヨモギ(緑)、米粉(白)の配色が美しかった。塩味のきいたシンプルな料理であったが、自然とともに生きてきたアイヌの文化が身近なものに感じられた。白米は貴重であり、普段はひえやあわを食べていたという。今回の料理は「ハレの日」の食事ということだろう。博物館で購入したガイド本(アイヌ民族博物館編『アイヌの歴史と文化(改定5版)』2002年)によれば、日常の主食の役割を果たしたのがオハウ(汁物)で、入れる食材でカムオハウ(肉汁物)、プクオハウ(ギョウジャンニク汁物)などがあつた。また、アイヌの食事の回数は朝と夕の2回であった。

また、川岸の一幕では、チブと呼ばれるアイヌの船が伝統技法で作られていた。北海道に自生する栓(せん)の丸太をくり貫き、舷側版を付けた板綴船である。完成するまでに2ヶ月ほど要するとのことだ。かつては、帆や櫂を付けて、白老の河川や海で漁に使われていた。「持ってってください」ということで、栓の木片をいただいた。一カ月も立つが、今でも澄んだ心地よい香りがする。香りとともに、板綴船を操ってオホーツク海を渡り、大陸物産を手に入れたかつてのアイヌの人々の姿が眼に浮かんでくる。



日中韓教材開発ワークショップ

日韓中教材開発ワークショップを開催して

実行委員長 大津 和子



日韓中3カ国による教材共同開発に向けてのワークショップが、7月30・31日に、ホテルKKR札幌で開催されました。韓国からは韓敬九、林慶澤、庾喆仁、趙蘭心、韓健洙、金多媛の6名、中国からは姜英敏、郭雯霞、王燕玲、田華新、王欣（いずれも敬称略）の5名、日本からは21名、計32名が参加しました。

まず、30日午前中にプログラム概要が説明され、4つの小グループに分かれて、教材開発のアイデアを共有するためにブレインストーミングを行いました。午後には、事前に各国で実施したアンケートに関する説明ののち、各グループから教材テーマについてのキーワードを出し合いました。討議の結果、テーマは5つにしぼられ、参加者がそれぞれ興味のあるテーマを選ぶかたちで、5グループが形成されました。各グループは、2カ国あるいは3カ国の参加者から構成されています。

30日午後遅くから31日午前中にかけて、各グループでそれぞれのテーマについて、これまでの蓄積を生かしながら、教材作成のための情報を出し合いました。いずれのグループでも非常に活発な議論が展開されました。提案されたさまざまなアイデアがポストイットに書かれ、次々と模造紙に貼り付けられていき、テーマの構造図が出来上がっていきました。さらに、今後の具体的な教材作成にあたって、各人の分担部分を明らかにするとともに、来年6月の富山研究大会で成果を発表するまでの、作業スケジュールおよび連絡方法などを確認しあいました。

31日午後には、各グループがパワーポイントを使って順次発表し、他グループからの質問やコメントを受けて、改善を図りました。

5つのテーマおよび主な内容は、次のとおりです。

A. 三国ラーメン物語（ラーメン食文化の多様性・共通性、ラーメンからみるアジア史など）

- B. 人間関係（お土産に対するお返し文化の多様性、トラブル解決法の違いなど）
- C. 日常文化（子どもの遊び、学校文化、お食い初め、バレンタインデーなどの行事）
- D. 人の国際移動（国際労働移動、国際結婚、留学生・就学生、観光客など）
- E. 平和・歴史認識（平和を築くための歴史認識、記憶＝歴史の共有化、民間交流など）

今後のスケジュールを、概ね次のように決定しました。メーリングリストなどを活用して意見を交換しながら、各自が必要なデータや資料等を使って具体的な教材を作成していきます。2007年11月に開催される韓国国際理解教育学会に日本からも参加し、作成した教材を持ち寄って検討します。その後、日韓中各国で実践し、その結果を2008年6月に富山大学で開催される日本国際理解教育学会第18回研究大会で発表します。（具体的なスケジュールは各グループで決定されます。）その成果をまとめて、国際理解教育教材集として出版できればと願っています。

日韓中3カ国の研究者・実践者が、国際理解教育の分野ではじめて顔を合わせてワークショップを実施したことは、具体的な教材作成への確実な第一歩となりました。今後、いっそう大きな成果を期待して、今回のワークショップの参加者だけでなく、広く学会会員のみなさまに各グループの実践や研究に加わっていただくことが確認されました。みなさまの積極的なご参加をお待ちしています。

各グループのまとめ役は次の方々ですので、直接ご連絡ください。連絡先が不明な場合は、大津までご連絡ください。

- A. 三国ラーメン物語 藤原孝章（同志社女子大学）
- B. 人間関係 姜英敏（北京師範大学）
- C. 日常文化 釜田 聡（上越教育大学）
- D. 人の国際移動 中山京子（京都ノートルダム女子大学）
- E. 平和・歴史認識 田淵五十生（奈良教育大学）

なお、このワークショップはユネスコ・アジア文化センター（ACCU）の「国際教育交流事業」として実施されました。ACCUのご支援に対し深く感謝申し上げます。



三カ国（日中韓）の子どもたちの生活

上越教育大学 釜田 聡

「三カ国（日中韓）の子どもたちの生活」グループの教材作成の経過について報告する。本グループは次の7名の参加者で構成された。（敬称略）

CHO NANSIM（韓国・教育評価院）、KIM JONG-HUN（韓国・APCEIU）、WANG XIN（中国・北京市第4中学）、東峰宏紀（日本・恵庭市立若草小学校）、橋詰典明（日本・江別市立角山中学校）、松井克行（日本・大阪府立三島高等学校）、釜田聡（日本・上越教育大学）

最初に各参加者が参加理由や共通教材への思いなどを語った。次にテーマについて話し合った。参加者の興味・関心が、スポーツやマンガなど、子どもたちの生活に関連したものに集約されたことや、参加者が子どもにかかわる写真資料を持参したこともあり、テーマを「三カ国の子どもたちの生活」とした。

続いて、子どもたちの生活を 学校、放課後、家庭と三つの生活場面に分け、それぞれの場面ごとに検討した。その結果、次の案が出された。

学校：登校時間、授業科目、学ぶ意義、道徳、他。

放課後：部活動、塾、遊び、友人関係、マンガ、スポーツ、他。

家庭：年中行事、旅行、遊び、家庭学習、祖父母、父母、他。

その後、三カ国共通教材の分類の視点として、「共通」と「異質」、「その他」とキーワードを設定し整理した。

「共通」は、三カ国の子どもたちが、共通に興味・関心をもつマンガや映画、音楽などを中心に教材化を探った。

「異質」は、三カ国の学校で扱いが異なる「道徳」の授業について、子どもの視点からの質問（「テストはあるのか」、「評価はあるのか」等）を整理して、教材化してはどうかと話が進んだ。「その他」では、子どもの成長に伴うお祝いや年中行事（お食い初め、1歳の誕生日、七夕など）を整理して、教材化してはどうかと話がまとまった。その後、日本側の参加者が、各自が所属する学校の子どもの様子を紹介した。日本の子どもの学校生活の様子について、中国と韓国からの参加者から多くの質問が寄せられた。また、「日中韓にとっての8月15日」と「日中韓の子育て事情」に関する写真教材について協議を深めた。

ワークショップのまとめの場面では、グループで作成した教材を参加者全員の前で紹介した。子どもたちの生活を窓口に、相互理解を深める可能性がある教材が数多く提供され、今後の三カ国での授業実践に期待が高まった。参加者からは「可能であれば、今秋開催される韓国国際理解教育学会や、来年6月開催の日本国際理解教育学会（富山）で、さらなる共通教材の開発や実践の成果等について報告してはどうか」という意見が出された。

韓日「移民」プロジェクトをたちあげる

京都ノートルダム女子大学 中山 京子

「人の移動」に興味をもつ Geon-Soo Han 先生（江原大学）、Chul-In Yoo 先生（済州大学）、森茂岳雄会員、服部圭子会員、志賀照明会員、中山京子が集まり、「人の移動（移民・International Migration）」をテーマとした韓日プロジェクトを立ち上げることとなった。このプロジェクトグループの出会いは、大会2日目の森茂、中山、居城、織田、小松、田尻、福山会員らの自由研究発表「日系移民をテーマとした教材開発と実践」のシリーズ発表の場にある。移民に関する教材開発に興味をもつコ氏とハン氏は発表を聞きにきてくれていた。服部会員はその分科会の司会者であり、フロアには志賀会員がいた。

グループワーキングでは、社会変動によりグローバルゼーション、多文化化が起こっている状況から、獲得させたい価値として、人権・公正・多様性・共生の四つを整理した。そして、実践研究計画を次のように設定した。

- (1) 本ワークショップでラフな指導計画を作成する。
- (2) 日韓のそれぞれの実践現場にあわせて詳しい指導計画をたて、それぞれの国で授業を実施する。
- (3) 両国の生徒の感想を提示し、比較して考察する。

授業づくりについては、日韓の児童生徒が共感的に学びあえる授業づくりを目指すことが確認され、以下の展開の骨子を作成した。

身近な食べ物から考えるグローバルゼーション
人はなぜ移動するのか

韓国からの出移民の歴史、入移民の現状を学ぶ
日本からの出移民の歴史、入移民の現状を学ぶ
韓日の移民をめぐる状況の相違点を考える

国内の多文化共生をめぐる具体的な事象を追求する
まとめ

「できるところから始めよう」という姿勢で、まずは11月の韓国での国際理解教育学会で中間発表を目指す予定である。



教材の構想図を示す「移民」プロジェクトグループのメンバー

日中韓ワークショップ「食」グループでは

埼玉大学 桐谷 正信



2日間の日中韓国際理解教材ワークショップでは、日本・中国・韓国の教員・研究者が「歴史認識」「移民」「食」「人間関係」「日常文化」の五つのテーマに分かれて、新たな国際理解教材の開発を行った。

私が参加した「食」

のグループでは、日本・中国・韓国に共通の料理である「ラーメン」を切り口に教材化を試みた。メンバーは、中国から郭雯霞先生、韓国から林慶澤先生・韓敬九先生、日本から藤原孝章先生・栗山丈弘先生・織田雪江先生・川口修先生・西尾英里子先生・桐谷正信の9名であった。「ラーメン」の教材化を試みたのは、日中韓の三国で身近な料理であり、東アジア共同体のつながりや、グローバル化とローカル化、三国の歴史と交流の姿を浮かび上がらせることができるからである。ラーメンの発祥の地は中国であり、その中国から日本に伝えられ、インスタントラーメンが発明された。インスタントラーメンが韓国に伝えられ、韓国ではラーメンといえばインスタントラーメンを差し、消費量世界一となっている。そして、韓国で独自に発展した辛いインスタントラーメンが日本や中国に輸出されている。このようにラーメンをめぐる三国の関係性を、ラーメンそのものと食べ方の共通性と相違性を教材化の軸とした。またラーメンの抱える現代的課題として、食の安全性や環境問題、食生活・食のあり方について考える課題へと発展させた。最終的には、主体的に食に向き合う中で、ラーメンとどのようにつきあっていく、三国共同で考えていく教材を構想した。

二日目の午後、各グループが開発した教材についてプレゼンテーションを行った。食グループは「三国ラーメン物語」と題するプレゼンテーションを行った。食グループに参加した中国・韓国の教員・研究者は、日本語が堪能であり、ディスカッションはすべて日本語で行うことができた。そのため、意思疎通をスムーズに行うことができた。しかし、一言でラーメンといっても、日中韓でそれぞれが持つラーメン文化は多様であり、中国や韓国の先生から聞くラーメンに関わるさまざまな事柄に驚きの連続であった。このワークショップを通して、ともすれば自国のラーメン文化を普遍的なものと捉えている自分の固定的な認識に気づくことができた。身近であるがゆえのこのような固定的な認識をゆさぶり、ひっくり返していくことが国際理解教育で重要なことであろう。そして、日本人のみでの開発ではでてこない多くの発想が、日中韓の国際ワークショップだからこそ出されたことは特筆に値する。このような取り組みを継続的に行っていくことが新しい国際理解教育を進展させていく原動力にあることを実感した。

中日韓国際理解教育教材協同開発参加記

中国 北京師範大学 姜 英敏



東アジア諸国の相互理解の必要性が強調されるなか、日本ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）の支援のもとで、中日韓三ヶ国の国際理解教育の関係者36人が北海道の札幌に集まり、2007年7月30日から31日にかけて教材協同開発を行った。去年よりこの提案が持ち出され、三ヶ国

ではそれぞれ参加メンバーを確定し、アンケート調査など事前準備を行ったが、三国間のコミュニケーションはすくなくなかったため、私は教材開発が始まる直前まで二日という短期間、しかも通訳をはさんで教材開発を行うことに対する一抹の不安を消せなかった。しかし、実際の結果は私の期待をはるかに超えるものだった。

まず、三ヶ国からの36人という複雑なメンバー構成だったにも関わらず、教材共同開発の進行は抜群な効率性をみせた。参加者全員がいくつかのフリーグループを作り、教材開発に関するアイデアを出し合った。それらのアイデアによって全員をラーメン、人間関係、歴史認識、日常文化、移民問題などのグループに分け、グループごとに教材開発を行うことにした。各グループでは教材の実施対象、教材内容、実施時間などについての詳細な計画が着々と進められ、早くも31日の午後は結果発表につながった。各グループの発表内容からみてそれらの教材は、二日で出来上がったとは信じがたいほど充実したもので、その後の実施結果が大変楽しみになった。

それから、教材開発の全過程で表れた皆さんの教材開発に対する熱意と豊富な経験、奇抜なアイデアに感動しながらその中の一員として自分がいることに感激していた。ラーメンという食べ物、学校の風景写真、生徒の日常生活、歴史認識の差異などいずれも生徒の身近な素材を教材開発のリソースとして活用し、三ヶ国のメンバーが見事にアイデアを出しあいながら夢中で教材計画を作成する場面は、胸が熱くなるほど感動的だった。

初めての試みでありながら、三ヶ国の国際理解教育の更なる歴史を刻む教材協同開発の意味は言うまでもなく重要である。今回の教材開発をステップとして、今後教科書などの学習資料の開発を始め三ヶ国共同作業の機会が増えることを望みたい。最後になるが、共同教材開発のため企画段階から心を砕いた日本国際理解教育学会の前会長米田伸次先生、現副会長の天津和子先生に心より感謝したい。

博学連携教員ワークショップ 2007 in みんなぱく

博物館を活用した国際理解教育

桜美林大学 高橋 順一

第3回博学連携ワークショップは、8月6日・7日に大阪吹田市の万博記念公園にある国立民族学博物館にて開催されました。今年は民博が開館されて30年を数える記念の年にあたるので、プログラムも内容豊かに2日間にわたっての開催となりました。日本国際理解教育学会と国立民族学博物館との協働の歴史はすでに数年を数えますが、博物館の持っているモノと、学会が持っている教育経験とをつなぎ合わせて、新しい化学反応を引き起こすことを期待しつつ、教員対象のワークショップを夏休みに開くという試みを始めたのは2005年のこと。今年は3回目になります。年をおって参加者の数も増え、今回は1日目が102名、2日目が106名(両日ともに参加したのは51名)という盛況ぶりでした。

しかし参加者の増加以上に印象的だったのは、各ワークショップを主導する学会員の国際理解教育の実践に関わる理解と技術の向上でした。それは、モノの利用法に関する着想、学習活動の構成、実行力のすべてにおいて高水準に達しており、なおかつ多様な方向性を有していました。さらに加えて民博の研究者の方々の教育活動に対する積極的な取り組みも特筆に値します。研究者は、一般に現場の教育実践にはあまり関心を持たない傾向にあります。民博においてもごく最近までは同様な傾向が支配していたと思いますが、今回のワークショップを見る限り、学習者の立場に積極的に近づき、教育活動を自らの専門家としての重要な責務の一つであると受け入れる研究者が増えていることを実感いたしました。

今回のワークショップの充実したプログラムの概要を紹介すると以下ようになります。まず第一日目は、協働の主体である国立民族学博物館の松園万亀雄館長と日本国際理解教育学会の大津和子副会長の挨拶から始まり、両氏の期待に満ちた挨拶に続いて、高橋順一(桜美林大)の基調講演があり、「物が育てる異文化リテラシー：はじまりはいつも遊びから」と題して、異文化理解教育では、特定文化の「内容に関する知識」の習得ではなく「異文化リテラシー」と呼ぶべき汎用性を持った能力資質の育成を目標とすることが重要である、ということが強調されました。続いて民博が全国の学校を対象に貸し出している出張展示キットともいえるべき「みんなぱく」の紹介があり、「ソウル・スタイル」というキットを実例に、その土台になっている思想や多くの努力が詰込まれた作成のプロセス等がていねいに説明され、その効果的な利用法が提案されました。続く第二部では、

「ザグレブチェストを使った教材開発の試み」

「仮面を使った教材開発の試み」

「特別展『みんなぱくキッズワールド - こどもとおとなをつなぐもの』からの総合的な学び」

と題される3件の実践事例報告がなされました。

二日目は、みんなぱく「アラビアンナイトの世界」に関する紹介から始まり、その後各部会に分かれて各自が選んだワークショップに参加しました。午前の部では、

「みんなで考えようESDカリキュラム」

「明日からできる博学連携 『みんなぱく』を使ったカリキュラムアイデアを出し合おう」

「くさび形文字で自分の名前を書こう」

「100円ショップでネイティブアメリカン」

の4つのテーマでしたが、そのすべてに多くの参加者が見られました。さらに午後の第二部では、林勲男氏(民博)の講演「『オセアニア大航海展』の見どころ」を導入に、民博で9月から開催される特別展「オセアニア大航海」に関連した4つの部会が開催されました。

「パンダナス物語」

「身近な素材から音が生まれる時 - 竹でつながる太平洋の島々」

「『割り箸』で地図をつくろう：マーシャル諸島の海図作りを体験 - 」

「オセアニアかるたを作ろう」

の4つです。各ワークショップが学会の教育専門家と民博の研究者の協働で実施されたことは、文化的知識の活用と学習活動作りの技術の両面で、質の高い参加体験を可能にしました。

最後に、日本国際理解教育学会の多田孝志会長による「まとめと講評」がまだ満員の聴衆を前にやや興奮した口調で語られ、2日間にわたる中身の濃いワークショップが終了しました。参加者誰も顔に満足感の見える、充実したイベントでした。実行に関わったすべての会員諸氏のご努力に対して感謝すると同時に、日本国際理解教育学会と国立民族学博物館という二つの組織を見事に連携させた森茂岳雄氏(中央大)と中牧弘允氏(民博)の類い希な組織力に心から敬意を表する次第です。



ワークショップ「100円ショップでネイティブアメリカン」でゲームを楽しむ参加者 (編集提供)

2006(平成18)年度総会報告

2006(平成18)年度事業報告および収支決算について

1. 第16回研究大会開催

2006年度の研究大会(実行委員長 岐阜大学寺島隆吉教授)は岐阜大学で6月10日(土)・11日(日)の両日にわたって、「多文化共生と国際理解教育」という総合テーマのもと120名以上の参加者を得て、盛会に行なわれた。今大会は53名の自由研究発表があり、特定課題研究では、日本、中国、韓国の3カ国による「アジアにおける国際理解教育の現状と研究ネットワークの構築の可能性」というテーマで行なわれ、中国からもパネリストとして参加された。今後、学会として3カ国より密接な関係が促進されることが期待される。本年度も韓国から、韓国国際理解教育学会チョン・ド・ヨン会長、アジア太平洋国際理解教育センターのカン・デ・ゴン所長をはじめ19名の多数が参加され、自由研究発表や、シンポジウムのパネリストとして積極的に参加された。

また、研究大会の総合テーマに合わせて、6月10日岐阜県「多文化共生シンポジウム2006」実行委員会主催、本学会や、岐阜県国際交流センターなどの後援のもと公開シンポジウム「多文化共生の学校づくりと地域づくり」が開催され、400名以上の参加者が集まり熱心に討議がなされた。期間中に総会が開かれ、平成17年度事業、決算報告と平成18年度の事業計画、予算計画が承認された。

2. 各委員会報告

1) 実践研究会(多田孝志委員長)

・国立民族学博物館との共催事業「博学連携教員ワークショップ2006」が、7月30日、大阪府吹田市の国立民族学博物館で、市民、教員、学生など150名余りが参加して開催された。

・11月11日・12日の両日、神奈川県横浜市、川崎市で、かながわ開発教育センター、神奈川国際交流協会との共催による国際理解教育実践研究会が開催された。参加者は33名で、フィールドワークを取り入れ、「地域にみる多文化化と国際理解教育」のテーマで実施された。

2) 研究委員会(渡部 淳委員長)

・科研報告書「第2分冊[理論研究]」刊行、及び刊行後の更なる研究を図る活動を行なった。

・第16回研究大会の特定課題研究「アジアにおける国際理解教育の動向と研究ネットワーク構築の可能性」の企画と実施。

・12月2日には、第6回コロキウムが「ドイツの国際理解教育」というテーマで本学会理事天野正治氏の話題提供で開催された。

3) 紀要編集委員会(大津和子委員長)

・紀要「国際理解教育」12号の刊行(第16回研究大会での配布)及び13号に向けての論文募集、編集作業がおこなわれた。

4) 学術交流委員会(田淵五十生委員長)

・第16回研究大会への韓国、中国参加者の受け入れ。
・韓国国際理解教育学会(10月ソウルで開催)への参加呼びかけ。
・他学会との調整、ASPへのかかわり等。

3. 第7回韓国国際理解教育学会及びワークショップ参加

10月14日・15日の両日、ソウルにある私立淑明女子大学で開催され、日本から13名が参加し、4名の会員が自由研究発表を行なった。またシンポジウム「多文化共生社会と国際理解教育」では神奈川県立麻生高校教諭の風巻浩会員が、2日目の日本、韓国、中国3カ国による教材開発についてのワークショップには、多田孝志副会長が発表した。

4. 公文国際奨学財団夏期教員研修派遣に学会会員の奈良県立法隆寺国際高校教諭森川与志夫氏と神奈川県立麻生高校教諭風巻浩氏の2名を推薦、派遣した。

5. 理事会開催

(理事会)平成18年6月9日 岐阜、平成19年1月13日 東京

(常任理事会)平成18年9月30日 東京

(公認理事、次期理事・役員会)平成19年3月11日 東京

6. 事務局報告

1) 会報発行 第29号(2006年9月) 第30号(2007年3月)発行

2) 共催事業

・国立民族学博物館との共同主催(共催)事業「博学連携教員研修ワークショップ2006」(2006年7月31日、大阪府吹田市 国立民族学博物館)

・2006年度国際理解実践研究会(2006年11月11日・12日、神奈川県)かながわ開発教育センター、神奈川国際交流協会との共催

・「ユネスコが提起する教育をどう受けとめるか～世界遺産教育と持続可能な開発のための教育を中心として」(2007年3月24日・25日 奈良教育大学 主催:日本ユネスコ協同学校(ASP)ネットワーク、ユネスコ国内委員会、奈良教育大学等)

3) 名義後援

・公開シンポジウム「多文化共生の学校づくり地域づくり」(主催:岐阜県「多文化共生シンポジウム2006」実行委員会)

・第24回開発教育全国研究集会2006(主催:開発教育協会)

・学校と地域がつくる国際理解教育:教員ワークショップ2006(主催:武蔵野市国際交流協会)

・平成18年度国際教育指導者セミナー(主催:JICA 大阪国際センター、帝塚山学院大学国際理解研究所、大阪府国際交流財団)

4) 会員数(2007年3月末)

358名(正会員311名、学生会員38名、団体会員9)

2006(平成18)年度 日本国際理解教育学会の収支決算

平成18年4月1日から平成19年3月31日まで

| 収入の部 | 科目 | | 予算額 | 決算額 | 増減 | 備考 |
|-----------|-----------|-----------|---------|-----------------------|-----------|----|
| | 入会金 | 120,000 | 66,000 | 54,000 | 3,000×22名 | |
| 年会費 | 3,100,000 | 3,687,000 | 587,000 | 正311名、学生38名、団体9団体(のべ) | | |
| 助成金 | 1,000,000 | 1,000,000 | 0 | 公文国際奨学財団より | | |
| 雑収入 | 250,000 | 346,077 | 96,077 | 委員会前年度残金、紀要販売等 | | |
| 当期収入合計(A) | 4,470,000 | 5,099,077 | 629,077 | | | |
| 前期繰越収支差額 | 330,441 | 330,441 | 0 | | | |
| 収入合計(B) | 4,800,441 | 5,429,518 | 629,077 | | | |

| 支出の部 | 科目 | | 予算額 | 決算額 | 増減 | 備考 |
|-----------------|-----------|-----------|-----------|------------------------|----|----|
| | 1. 事業費 | 3,250,000 | 3,648,809 | 398,809 | | |
| 大会運営補助費 | 400,000 | 400,000 | 0 | 19年度大会用 | | |
| 紀要編集委員会費 | 320,000 | 320,000 | 0 | 13号編集費 | | |
| 実践研究委員会費 | 250,000 | 250,000 | 0 | 事業2回開催 | | |
| 研究委員会費 | 180,000 | 180,000 | 0 | | | |
| 学術交流委員会費 | 150,000 | 119,220 | 30,780 | 大会通訳料、通訳滞在費 | | |
| 紀要刊行費 | 1,100,000 | 1,100,000 | 0 | 12号刊行費 | | |
| 会報刊行費 | 200,000 | 320,460 | 120,460 | 28,29,30号発行費 | | |
| 名簿刊行費 | 0 | 0 | 0 | | | |
| 理事会費 | 500,000 | 820,179 | 320,179 | 19年度次期理事の会含む | | |
| その他事業費 | 150,000 | 138,950 | 11,050 | 18年度大会追加補助他 | | |
| 2. 管理費 | 1,190,000 | 1,120,663 | 69,337 | | | |
| 事務局業務委託費 | 400,000 | 200,000 | 200,000 | | | |
| 人件費 | 270,000 | 180,000 | 90,000 | 事務アルバイト費 | | |
| 通信費 | 300,000 | 490,364 | 190,364 | 電話・郵送料・引越し運搬等 | | |
| 設備・備品費 | 50,000 | 97,020 | 47,020 | パソコンリース料、インターネットメンテナンス | | |
| 消耗品費 | 30,000 | 16,809 | 13,191 | | | |
| 会議費 | 20,000 | 23,580 | 3,580 | | | |
| 旅費交通費 | 60,000 | 84,210 | 24,210 | 事務局引継、等 | | |
| 印刷製本費 | 50,000 | 23,100 | 26,900 | 封筒印刷 | | |
| 雑費 | 10,000 | 5,580 | 4,420 | 振込手数料等 | | |
| 3 予備費 | 0 | 0 | 0 | | | |
| 当期支出合計(C) | 4,440,000 | 4,769,472 | 329,472 | | | |
| 当期支出差額(A)-(C) | 30,000 | 329,605 | 299,605 | | | |
| 次期繰越収支差額(B)-(C) | 360,441 | 660,046 | 299,605 | | | |

2007(平成19)年度事業計画・役員・予算

2007(平成19)年度事業計画

- 1 全体方針
 新体制による学会運営と学会組織の改善
 会員のニーズに応える課題に関わる研究・実践の展開
 科学研究費成果の会員の共有化
 海外の学会・団体、国内の関連組織との連携の発展
 財政の安定化に向けて、会員の拡大と会費納入の促進
2. 各委員会等事業計画
- 1) 研究委員会
 優れた教育実践者・研究者が参集している本学会の特色を生かし、国際理解教育に関する理論的・実践的な研究課題を追究していく。
- 2) 研究委員会
 紀要「国際理解教育」14号の編集と刊行
 会員からの論文投稿募集
- 3) 各事業
- 日中韓相互理解のための教材開発ワークショップの開催
 7月30日(月)・31日(火) 札幌
 国立民族学博物館との共同事業の開催
 8月6日(月)・7日(火) 国立民族学博物館
 国際理解教育実践研修会の開催
 開催場所・時期 富山・2007年11月23日(金)
 奈良・2008年2月 予定
 詳細が決まり次第、HPに掲載する。
- 4) 2007年度 第17回研究大会の開催
 7月28日(土)・29日(日) 北海道教育大学 実行委員長 大津和子
- 5) 2008年度第18回研究大会 予定
 2008年6月14日(土)・15日(日) 富山大学 実行委員長 田尻信壹
- (日本国際理解教育学会事務局)

2007(平成19)年度 日本国際理解教育学会 役員

- 顧問：天城 勲 米田 伸次(帝塚山学院大学国際理解研究所顧問)
- 常任理事：多田 孝志(会長 目白大学) 大津 和子(副会長 北海道教育大学) 田淵 五十生(奈良教育大学)
 藤原 孝章(同志社女子大学) 森茂 岳雄(中央大学) 渡部 淳(日本大学)
- 理事：伊井 直比呂(大教大附属池田高校) 今田 晃一(文教大学) 宇土 泰寛(相山女学園大学)
 高橋 順一(桜美林大学) 田尻 信壹(富山大学) 寺島 隆吉(岐阜大学)
 永田 佳之(聖心女子大学) 中山 京子(ノートルダム女子大学)
 二宮 皓(広島大学) 嶺井 明子(筑波大学) 山西 優二(早稲田大学)
- 監事：上別府 隆男(東京女学館大学) 山田 千明(共栄学園短期大学)
- 事務局長：中山 博夫(目白大学) 事務局次長：高野 成彦(目白大学)

(任期は2010(平成22)年3月31日までの3カ年)

平成19年度 日本国際理解教育学会収支予算

平成19年4月1日から平成20年3月31日まで

| 収入の部 | 科目 | | 19年度予算額 | 備考 |
|-----------|-----------|---------|----------------|-----------|
| | 入会金 | 120,000 | | 3,000×40名 |
| 年会費 | 3,100,000 | | | |
| 助成金 | 1,000,000 | | 公文国際奨学財団より | |
| 雑収入 | 250,000 | | 委員会前年度残金、紀要販売等 | |
| 当期収入合計(A) | 4,470,000 | | | |
| 前期繰越収支差額 | 660,046 | | | |
| 収入合計(B) | 5,130,046 | | | |

| 支出の部 | 科目 | | 19年度予算額 | 備考 |
|-----------------|-----------|-----------|---------------------|----|
| | 1.事業費 | | 3,540,000 | |
| 大会運営補助費 | 400,000 | | 20年度大会用 | |
| 紀要編集委員会費 | 270,000 | | 14号編集費 | |
| 紀要刊行費 | 1,100,000 | | 13号刊行費 | |
| 会報刊行費 | 300,000 | | 31,32号発行費 | |
| 理事會費 | 520,000 | | | |
| 研究委員会費 | 600,000 | | | |
| 国際理解教育実践研修 | 200,000 | | | |
| 国立民族学博物館との共同事業 | 100,000 | | 博学連携教員研修ワークショップ2007 | |
| 国際費 | 50,000 | | 博物館を活用した国際理解教育 | |
| 2.管理費 | | 1,240,000 | | |
| 事務局経費 | 250,000 | | | |
| 人件費 | 240,000 | | 事務アルバイト費 | |
| 通信費 | 390,000 | | 郵送料 | |
| 設備・備品費 | 140,000 | | パソコン・プリンタ代 | |
| 消耗品費 | 40,000 | | インク・宛名ラベル代 | |
| 会議費 | 30,000 | | 会場借料 | |
| 旅費交通費 | 60,000 | | | |
| 印刷製本費 | 80,000 | | 封筒印刷 | |
| 雑費 | 10,000 | | 振込手数料 | |
| 3.予備費 | | 50,000 | | |
| 当期支出合計(C) | | 4,830,000 | | |
| 当期支出差額(A)-(C) | | 360,000 | | |
| 次期繰越収支差額(B)-(C) | | 300,046 | | |

理事会(各委員会等)報告

研究委員会より

中央大学 森茂 岳雄

2007年3月の理事会において、次期の本学会の研究推進の方針として、現代的な課題や会員のニーズをふまえた研究活動を推進して行くことが確認され、このための具体的な方向として下記が話題となった。

- ・現場の実践者が関心をもち、学会の研究成果に期待している研究の推進
- ・優れた研究者や実践者が協力しているとの実感がもてる研究の推進
- ・院生などが、キャリアアップを含め、自分のためになるという実感がもてる研究の推進

研究委員会としては、これらの学会の基本方針に則り、今年度から研究委員会担当理事に学会として取り組む具体的な課題を提出していただき、担当理事を中心に研究者、現場教員、大学院生等のグループによるプロジェクト研究方式で研究を推進して行くことになった。担当理事からは、世界遺産を通しての国際理解教育、持続可能な開発のための教育(ESD)の実践化等の研究課題が提出され、7月の研究大会時の理事会において今後の研究推進のあり方について議論がなされたが、課題設定やその具体的方法について意見が出され、今後研究委員会を開催して継続して話し合うこととなった。

今後は、2003年度より3年に渡って行われた科研費研究「グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実践的研究」、及びその研究の総括として行われた今年度の研究大会における公開シンポジウム「転換期を迎える国際理解教育」における議論を踏まえ、研究課題とその具体的方法を決定し、公開研究会を開催するなどして会員の意見を吸い上げながら研究を積み上げ、来年度の研究大会における特定課題研究につなげていきたい。

紀要編集委員会より

同志社女子大学 藤原 孝章

編集委員会では、以下の編集方針が確認された。

- 1) 研究論文と実践研究を同列に扱う。前号からの方針を引き継ぐ。実践研究は単なる実践報告ではなく、国際理解教育の視点や観点からみた実践の位置づけ、分析をともなうものだからである。
- 2) 優れた学会発表の投稿など会員からの投稿をすすめて、学会発表が見通しをもった研究や実践になることを奨励したい。
- 3) 投稿された論文に対しては、ていねいな査読をおこない、リライトの仕方などについてもアドバイスをする。

今年度の編集会議の場所について、従来の東京から京都に変更することで合意された。主な理由は、今年度の編集委員が関西圏を中心に構成されるためである。これによって、委

員会開催の予算も、昨年に比べて2割ほど削減することが可能となった。また、今年度の編集スケジュールについては、今回の研究大会が7月下旬(28・29日)であったため、前回より1週間ほど遅くして8月6日とし、それに準じて、原稿締め切りも9月30日とした。査読など、以後の編集日程は、昨年とほぼ同様である。

懸案になっていた英語による論文投稿については、会員に現場の実践者が多く、日本語による論文の方が容易に理解できること、共通語としての英語の有用さは理解できるものの、英語だけを認め、他の外国語を認めないというのは学会の趣旨から考えても不適切であること、外国語での応募に対応することは編集上現実的に困難であることなどから認めないことにした。

また、第15号からは、特集を設けて論文を募集すべきであるとの議論がなされた。特集に関わる論文を掲載することで、学会が取り扱うテーマや課題の広がりや深まり、切実性を明示することができるからである。特集・テーマの内容については今後委員会にて検討していく。

2006年度事業報告及び2007年度事業計画

日本国際理解教育学会事務局

理事会では、2006年度の各事業の総括が行われた。研究委員会からは、特定課題研究、コロキウム等の研究活動について研究の過程と成果が報告された。

国際交流委員会からは、日本・韓国の関連学会・大学などとの共同研究は、本学会の特色あり、今後も継続すべきとの報告がなされた。

実践研究委員会からは、大阪での国立民族学博物館との共同研究、また神奈川県で開催した「地域と連携した国際理解教育実践」をテーマとした実践研究会の報告がなされた。

こうした昨年度の各委員会の報告を受け、また、学会の本年度の方針を具現化するため、2007年度は次の事業を推進することとした。

日中韓相互理解のための教材開発ワークショップ

詳細は本会報8～10頁を参照ください。

国立民族学博物館との共同研究事業の開催

本学会と関連組織との連携の発展の具現化を進める機会と位置づける。国際理解教育の実践の新たな展開を推進し、また会員を増加させる機会であり、継続していくこととした。詳細は本会報11頁を参照ください。

国際理解教育実践研修会の開催

国際理解教育の実践の普及、また学会員の実践力の向上を目指す、殊に新入会員の国際理解教育の実践づくりへの支援の機会とし、全国での展開を目指していくこととした。

会員だより

モノと日本人 - ニュージーランドにおける 20代日本人学生の意識の変化

京都橘大学 磯田 三津子

私は、2005年3月から2006年10月までニュージーランドに滞在した。私が暮らしたのは、ニュージーランドで最も大きな街オークランドである。写真は、私が暮らしていたアパートの裏庭からの風景である。アパートは街の中心に近かったが、写真の通り美しい自然がある。

私は、オークランドで語学学校にカウンセラーとして勤めていた。私が勤めていた学校は、中国、韓国、日本、カンボジア、ブラジルからの学生が通っていた。日本人学生の多くは、20代のワーキングホリデービザ保持者である。彼らはニュージーランドで一年を過ごす。

私は、勤務先の語学学校で学んでいた日本人学生のニュージーランドにおける変化の過程をととても興味深く観察していた。その大きな変化のひとつは、モノに対する考え方への変化である。最新の携帯電話、ブランドのバックを大切にしていた彼らが、滞在から2ヶ月くらいすると、それらを必要ないと思うようになるのである。日本は物質的に豊かな国である。日本では、どんなモノでも種類が豊富で、最新のものを手に入れることができる。一方、ニュージーランドで販売されているモノは、数も種類も豊富ではない。電化製品も日本のように最新のものは多くない。新鮮な食品も少ない。たとえば、魚である。ニュージーランドは海に囲まれた国だから魚が多く売られているはずである。ところが、スーパーに行っても魚は少ない。なぜ、スーパーに魚が並ばないのかと尋ねると、日本に輸出されているからだという。日本人が、ニュージーランドの魚を食べているのだ。

日本人は多様で質の高い多くのモノに囲まれている。しかし、実際、モノはそれほど必要なものなのか。モノが豊富であるがゆえに、人々はモノにコントロールされていたのではないか。このことに、20代の日本人たちは気づくのである。ワーキングホリデーを終えた人々の多くは、もう一度ニュージーランドで暮らしたいと言う。ニュージーランドには、素晴らしい自然、そして、日本人同士、他の民族間で助けあう社会がある。経済的、物質的豊かさよりも、人間関係や自然の豊かさを求めるようになった20代の日本人の変化を通して、私は日本の社会について考えさせられた。



アパート裏庭からの風景

持続可能な教育実践～学生時代の経験から～

目白大学 前田 ひとみ



高校卒業後18歳で渡米し、アラバマ大学の語学学校、オレゴン大学、ミネソタ大学大学院と高等教育の全てを米国で受けた私にとって国際理解教育は常に関心のひとつであり、また数多くの実践に携わる機会にも恵まれた。その実践内容の一つを紹介したい。

ミネソタ大学大学院修士課程の1年時に、世界の問題を議論するGlobal Discussion on Campusという会を企画・創立・運営した。これは大学がキャンパス内を国際的にするというミッションの中、学生から企画を募っていたもので企画内容や難易度によって授業料免除などの特典があり、その企画として応募したものが私の世界の問題を議論する会であった。私は議論会を毎月一回キャンパス内で開催し、トピックに沿った信頼性のある資料と知識人のスピーチ等により、その時々の世界の諸問題を様々な国の学生とで討論していた。参加者はアメリカ人学生、外国人留学生、大学スタッフなどで、参加者が自分たちの視点を共有し、理解し合い、どのようにしてその問題が解決できるかということ話し合うなど、他では躊躇するようなトピックを扱っていた。個々の視点や考え方は当然のことながら、彼らの育ってきた文化環境や価値観が反映されるため、アメリカ人学生だけでなく、様々な国からの留学生が集まることで大変有意義な議論をすることが可能になった。

私にとって国際理解教育とは「知識の移動」や「知識の共有」だけでなく、学習の場を通して、態度や価値観にまで幅広く波及すべきものであると感じている。結局、このような企画を卒業までの4年半開催したのだが、大学側のメリット(キャンパスを国際的にできる)企画・運営学生(私)のメリット(リーダーシップ学習&学費免除)、参加者のメリット(無料で世界の問題を学び議論に参加できる)など、独りよがりではなくバランスの取れた教育を行うことで、より持続可能な教育プランとなりうると痛感した。そして国際理解教育という視点からもこの企画は大変好評で、卒業時にこの企画をそのままの形でマニュアル化し今では同じ趣旨の元、中国人の学生が引き継ぎ毎月開催している。

日本とインドネシアの交流 「えんぴつ1本からの国際ボランティア」

インドネシア教育振興会代表 / 富山大学学生 窪木 靖信

当会は、私とインドネシアからの留学生とで始めた小さなNGOです。

会の目的は、第一に、インドネシアの子ども達の教育条件を改善し、教育を受ける権利を保障すること、第二に、現地への支援を通して、日本の子ども達に相互理解と互恵の精神を育むことです。日本とインドネシアに事務所を構え、各種財団からの財政的支援と観光地バリ島でのインターネットカフェでの収益事業を主たる財源として自立を目指した活動を展開中です。

現在の主要な活動内容は、現地の子どもの文具の配布、日本と現地の学校との交流の仲立ち、現地でのIT教材の作成とIT無料講習会の開催、インドネシアを対象とする国際理解のためのウェブ教材（日本の子ども向け）、現地の学校等の新築と改築、「ワンコイン・プロジェクト」そして、現地ヘスタディーツアーの実施などです。

当会は小さな団体のため、残念ながら県内でさえ広く認知されるまでには至っていません。しかし、ホームページを見た子ども達や大学生が活動を支えてくれています。現在では1年間にボランティア活動する子ども達は3000人を超え、寄贈したえんぴつは累計100万本を超えました。ワンコイン・プロジェクトは、五百円玉1つにメッセージを添えて寄付することで、現地の図書を一冊購入しメッセージを図書に貼付け学校に寄贈する事業です。とかく寄付しても実際に現地に届いたかわからないものです。その点をクリアーにして実際に寄付した方々が現地で確認できます。

今年8月に、第5回目の現地スタディーツアーを行いました。これまでに富山大学生を中心に延べ35名を派遣してきましたが、今回中学生が1名参加しました。出発までに勉強会を開き講師役を務めたのは活動を支える大学生です。

小さな団体故にできることが限られていますが、主体的に関わることができず。異質な文化と出会うことは、自らの幅を広げることでありとことを実感しています。

子ども達と同様に私たち大人同士も相互理解と相互変容を目指して活動を続けていくつもりです。



インドネシアの小学校での交流

「ルークチャーイ・イーブン」または「ノーン・マキ」

広島大学大学院生 / 日本学術振興会特別研究員 牧 貴愛



タイの家族と一緒に

サワディーカップ。私は、タイ初等中等教員の質的向上施策について勉強しています。タイに関心を持ったきっかけは、学部生の頃、タイ東北部ノンカイ県の中等学校に日本語教師ボランティアとして2ヶ月間滞在したことです。校長先生のお宅にホームステイして、言葉が全く通じないながらも、辞書とメモ帳を片手にとにかく何でも挑戦していました。そうすると不思議と笑顔が絶えず、気がつくとタイに埋没していました。とくに、学校を包み込んでいた教師や子どもたちから醸し出される温かく柔らかな雰囲気は帰国後も私の頭から消えることはなく、タイについて勉強したいと思うようになりました。

修士課程では、チューラーロンコーン大学教育学部に1年間留学する機会を得ました。当時は、学校の現場で教育改革がいかに実践されているのか、教師や子どもたちの日常に影響はないのかといった関心から、小学校に半年ほど通い、教員や子どもたちと終日一緒に過ごしました。この間、宿を提供し研究のアドバイスをくれたのは、ノンカイでお世話になった校長先生とその奥さんです。二人は、私を「ルークチャーイ・イーブン（日本人の息子）」と呼び、家族の一員として受け入れてくれ、私も二人を父、母と呼ぶようになりました。

昨年度は8ヶ月間、タイへ帰る機会を得て、タイ教育省に訪問研究員として滞在しました。ここでは、多くの「姉」や「兄」との出会いがありました。タイでは、親しい間柄には「ピー（姉、兄）」または「ノーン（妹、弟）」をつけて呼び合います。気がつけばみんなが私を「ノーン・マキ」と呼んでくれるようになりました。

タイの父母や兄弟姉妹との出会いは、私にとって大きな励みであり、タイに対峙するとき常に真摯でありたいという思いをもたせてくれます。また、こうした出会いのおかげで、研究者としての視点だけではなく、家族としての心をもってタイに接することが出来ているのだと思います。タイの家族の幸福を祈りながら、日々、勉強を進めています。

地域から世界を考える

山口県立徳山高等学校 藤村 泰夫

今日、自分たちの身近な地域に、外国人が居住し、彼らとの共生が求められている。私が顧問をする徳山高等学校地理歴史部は、「身近な地域から世界を考える」をテーマに、地域に住む外国人から生活習慣などの文化や歴史的体験を聞き取り、調査研究を行っている。昨年は、県内4校の高校生達と「地域の中の中東」と題して地域に在住する中東・イスラム世界からの来訪者やこの地域に長年居住経験のある日本人から宗教などの生活習慣や歴史的体験などをお聞きした。私たちが担当した周南地域では、地域で料理店を経営するパキスタン人から話を聞き、石油会社の訓練センターに研修で来日したUAEやオマーンの方と直接交流会を持った。このような体験を契機に、今年度は地域に住む外国人から「戦争と平和について考える」と題して、それぞれの母国で戦争体験がどのように伝わっているかを探っている。これまでパキスタン人、フィリピン人女性、アメリカ人女性から話を聞いた。その中でアメリカでは、第二次大戦を学ぶ際に「ホロコスト」に重点が置かれていることやフィリピンでは、年輩の方の中には日本の侵略の酷さを記憶し、テレビ番組で日本がうつるとチャンネルを変える人もいることを知った。



2007年7月 フィリピンの人たちとの交流

このような体験を通して生徒達は世界の人々が「戦争と平和」についてどのように考えているかを知り、日本人という枠から抜け出して広い視野に立って「戦争と平和」について考える力を身につけることができるように思われる。

また、「戦争と平和について考える」ことを通して、世界が日本をどのように見ているかを知る契機にもなり、それは自分たちのありかたそのものを問うことにもつながる。「国際理解教育」とは、現地に行きそこで異文化体験を通じて理解することも重要であるが、その一方で身近な地域に住む外国人と交流し、彼らとともに共存共生の道を探ることも重要である。そうした試みの一つとして今後も行っていきたい。

第8回韓国国際理解教育学会に参加しませんか

第8回を迎えた韓国国際理解教育学会の研究大会が下記の予定で開催されます。

例年、日本から10名以上の参加者があり、研究発表やシンポジウムでは、熱い討議が繰り広げられています。また、日韓の友情を深める場にもなっています。ぜひ、多くの会員のご参加を期待しています。参加ご希望の方は、10月10日までに、メール等で事務局までご連絡ください。

なお、自由研究発表をご希望の方は、タイトルを添えて、学会事務局までご連絡ください。締め切りは10月10日です。発表をご希望の方には、後日、発表抄録、発表時間など詳細をお知らせいたします。また、発表時には例年、韓国語の通訳がつけられています。

参加、発表の申し込み締め切りまでに十分な期日がありませんこと、お詫びいたします。

日本国際理解教育学会事務局

テーマ：国際理解教育の概念の再考察

- 日程：2007年11月10日(土)・11日(日) プレイベント(9日(金))
会場：キョンサン大学(トンヨンキャンパス)慶尚南道(キョンサンナンド)
主催：韓国国際理解教育学会、ユネスコ・アジア太平洋国際理解教育センター
後援：教育・人的資源開発省、トンヨン地方知識・技能センター、キョンサン大学
内容：11月9日(金)プレイベント
16:00-17:00 エクワンウォン(特別教育センター)訪問 19:00- 歓迎レセプション(キョンサン大学主催)
11月10日(土) 研究大会
10:00-10:30 基調講演「平和と朝鮮半島、そして国際理解教育」 10:45-13:00 シンポジウム
14:00-17:30 自由研究発表 17:30-18:30 分科会報告 19:00- レセプション(トンヨン市長主催)
11月11日(日) 中国・日本・韓国協同ワークショップ
9:00-12:00 テーマ「国際理解教育の概念の再構築」 14:00-16:00 トンヨン市内観光

<経費及び渡航手続き>

渡航、宿舎に関しては原則として各自で手配をお願いします。大会参加費は韓国学会の負担の予定ですが、その他は自己負担です。

公文国際奨学財団・海外派遣報告

ハワイおよびアメリカ西海岸にある 日本の音楽文化を訪ねて

東京学芸大学附属竹早中学校 居城 勝彦

今回は、海外の和太鼓における伝統性の保持と変容、及び創作性について取材することを目的とし、ハワイおよびアメリカ西海岸で現在活動中のグループや研究者への取材を行った。

まず、ハワイ島ヒロでは西本願寺での盆ダンスに参加した。ハイスクールの生徒たちがやぐらを囲み楽しそうに踊る姿を日系2世の方たちがベンチに座りながら見守る様子に、日本の都市部ではなかなか見ることのなくなった異世代交流の大切さを感じた。また、フィ沖縄の古武道太鼓の練習に参加させていただき、若い世代が自分のルーツを大切にしながら、新しい文化を創っていかこうとする姿に触れることができた。

サンノゼでは、サンノゼ太鼓のメンバーであり芸術監督のPJヒラバヤシ氏とお会いし、練習会場の見学や教育プログラムについて丁寧に解説していただいた。和太鼓を通して表現としての音楽文化のみならず、他の伝統文化に通じるような精神性を伝えることに重きを置いていることがよく理解できた。

このほか、スタンフォード大学国際異文化間教育プログラムのディレクターのゲイリー・ムカイ教授を訪問し、日系人の音楽、芸能等に関連する教育プログラムや授業案などの資料を閲覧し、教材開発への示唆を得た。ロサンゼルスでは全米日系人博物館を訪問し、博物館の教育プログラムについてのヒアリングを行った。また、ハワイ大学ヒロ校本田正史教授が運営するハワイ日本人センターを訪問し、展示室作成を体験した。

今回の研修では、訪問先で日系人の方の貴重な話を聴く機会が多かった。この方たちの経験と思いや、日本から海を渡ったところで脈々と受け継がれ発展する音楽文化について、子どもたちがより身近に感じられるように教材研究を行い、児童生徒が取り組む活動がより国際理解につながるように考えていきたい。



ハワイ島ヒロでの盆ダンスにて

ヨーロッパ4カ国を訪問して

広島県大竹市立栗谷中学校 小嶋 祐同郎

この度、学会のご推挙と公文教育財団のご支援をいただき、イタリア、フィンランド、デンマーク、そしてドイツの4カ国を訪問する機会を持つことができた。夏休みということもあって、学校訪問は3校にとどまったが、幾つかの研究施設の訪問や、現地の多くの人とのインタビュー活動を通して、一定の成果を挙げることができた。紙面の都合で詳細は次の機会とし、今回の研修で考えたことを簡潔に述べると次の2点に集約できよう。

1つは、EUという国民国家を超えた作業に着手しているヨーロッパを通して、わたしたちはどこでどのような市民意識を形成していけばよいのかという問題である。

そしてもう1つは、グローバル化の進む中で求められる新しい教育の方向性についてである。この2つはどのような社会観を持ち、それを基盤にしてどのような教育観や学校観を構築するのかという問題として関係性を持っている。また、それらをつなぐものとしてのESDや人間、そしていのちの学びがある。その解答を示唆するものとして、現地で目にしたbelieveで始まる次の2つの言葉を記すことで報告に変えたいと思う。1つは第2次大戦中にナチスに対するレジスタンス活動で処刑された23歳のデンマークの若者が母に宛てた最後の手紙の一節であり、もう一つはあのアンネ・フランクの日記に記された有名な一文である。

I believe that we'll meet again beyond death.

I believe the goodness in people.

また、今回の研修に際し公私両面にわたって暖かいご支援を賜った多田孝志会長、米田伸次前会長をはじめとした学会関係者の皆様、ヨーロッパの教育事情について貴重なご助言を頂戴した早稲田大学山西優二先生、聖心女子大学永田佳之先生、さらには現地の学校訪問にご協力いただいた立教大学大学院の山田祐子さんに心から感謝申しあげ、様々な人の心のつながりの中に自分が存在することを改めて実感できたことを、何よりの糧とし今後に生かしたいと思う。



お知らせ これからの行事 / イベント案内

国際理解教育研修会 2007 in 富山のお知らせ

日本国際理解教育学会と富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センターがジョイントして、国際理解教育に関心をもっている初心者の方、国際理解を扱った授業を行いたいと思っている方を対象とした教育研修会を、下記のように実施します。小・中・高等学校の教員、大学生及び国際交流・国際協力に関心のある方の参加をお待ちしています。

<記>

- (1) 日 時：2007年11月23日(金) 10:00～17:00
- (2) 会 場：富山大学人間発達科学部多目的教室
- (3) 講 師：多田孝志会長、森茂岳雄常任理事、多文化社会米国際理解教育研究会
森茂氏と多文化社会米国際理解教育研究会の皆さんには、「移民」、「人々の移動」をテーマに参加型ワークショップを行って頂きます。人の移動から考える国際理解教育の事例を学び、授業づくりのヒントを得て欲しいと思います。
- (4) 参加費：無料
- (5) 問い合わせ及び申し込み先：
〒930-8555 富山市五福3190 富山大学人間発達科学部附属実践総合センター
田尻研究室 Tel.&Fax. 076-445-6381 E-mail: stajiri@edu.u-toyama.ac.jp
センター事務室 Tel.&Fax. 076-445-6380
- (6) 申し込み締切：11月22日(木)

(文責：田尻信壹)

国際理解教育実践研修会 in 奈良(案)

昨年度新しく多くの方に学会員になっていただきました。今後さらに新入会員が増えると思われます。学会として、ただ入会してもらうだけでなく、新入会員の方に何らかのフォローをしていくことが実践の普及、学会活動の充実には必要と考えます。そこで、下記のような研修会を計画しています。

<記>

- (1) 目的：国際理解教育学会新入会員を対象とした実践的な研修を行い、現場での国際理解教育の実践普及をめざす。
- (2) 対象：学会入会3年以内の学会員を主な対象とする。
3年以内の学会員には個別に案内を郵送し、その他学会 Web ページで全学会員に知らせる。
- (3) 日 時：未定 平成20年2月頃を予定
- (4) 場 所：奈良県(昨年度最も新入会員が多かったため)、会場は未定。
- (5) 講 師：今田委員、田淵委員、田尻委員が基本的な計画を立て、木村会員(奈良県)および小嶋会員(広島)の協力を得て実施する。
- (6) 研修内容： 国際理解教育の現状と課題(今田委員、田淵委員)
実践報告(木村会員、小嶋会員)
ワークショップ

所要時間：全2時間半

キーワード：ESD、世界遺産、カリキュラム開発、教材開発

(文責：今田晃一)

事務局通信

新入会員

以下の15名の方が平成19年7月27日までに入会を承認されました。

| 氏名 | 所属 | 氏名 | 所属 |
|--------|--------------|--------|-------------|
| 牧 貴愛 | 広島大学大学院 | 細田 孝哉 | 北海道札幌清田高等学校 |
| 志田 光瑞 | 北海道教育大学大学院 | 藤谷 哲 | 目白大学 |
| 市川 享子 | 明治学院大学 | 林原 慎 | なぎさ公園小学校 |
| 曾我 幸代 | 聖心女子大学大学院 | 本多 千明 | 聖トマス大学 |
| 仲座 栄利子 | 沖縄キリスト教短期大学 | 荒屋 誠 | 富山大学大学院 |
| 森川 愛子 | 国際基督教大学 | 平塚 ゆかり | 立教大学大学院 |
| 栗山 丈弘 | 文化女子大学室蘭短期大学 | 細谷 倫子 | 立教大学大学院 |
| 島田 昌幸 | 群馬社会福祉大学 | | |

寄贈図書

嶺井 明子著『世界のシティズンシップ教育』東信堂
松尾 知明著『アメリカ多文化教育の再構築』明石書店

事務局からのお願い

会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様の間わられました文献・図書・報告書・教材など、また、会員の所属する学校での紀要等がございましたら、学会にご寄贈ください。その際、助成金をいただいております公文国際奨学財団にも送らせていただきますので、できましたら2部お送りください。

年会費納入のお願い

当学会の活動は会員の皆様の会費でまかなわれております。今年度までの年会費未納の会員は至急会費をお支払いいただきますよう宜しくお願いいたします。

会費：正会員：8,000円 学生会員：4,000円 団体会員：30,000円

<郵便振り込み>

口座番号：00120-5-601555 加入者名：日本国際理解教育学会

住所・所属等変更連絡のご協力をお願いします！

事務局からの郵送物が「転居先不明」で返送され、また、会員のみなさまへのご連絡が滞ってしまっている場合が少なからずあります。所属変更によるお引っ越しなどで住所・所属等に変更がありましたら、ファックス(03-5996-3166)または、Eメール(kokusai@mejiroac.jp)でお知らせください。また、会員種の変更もお知らせください。

紀要『国際理解教育』の購入手続きについて

現在、第1号を除き、最新の13号までの在庫がございますが、在庫が僅少の号も出始めております。学会ホームページにバックナンバーの総目次が掲載されています。ご希望の号数および冊数をファックスまたはEメールで事務局までお知らせください。振り込み用紙をお送りいたします。なお、会員の皆様には、会員価格でお求めいただけます。

学会ホームページのご案内

事務局の移転にともない、学会ホームページもリニューアルしました。

研究大会やワークショップなどの情報はこちらでご覧いただけます。アドレスは次のとおりです。<http://www.kokusairikai.com/>